クラブ目IAだより

「改めて地球環境問題について認識しよう」

H．7．12．13
石　黒　隆　敏

1．地球環境問題とは

環境＝Environment … PESのＥでもあるこの言葉は、1960年代から一般に使われ始めました。1970年 4月22日に「第１回アースデイ（地球の日）」がアメリカで開催された時、私はこの催しに参加しました。ニューヨークでは10万人が五番街に集まり、車をストップさせて、その静かさや空気の汚れていない街を実感しました。その後、日本でこれは歩行者天国と呼ばれる形で導入されました。

1971年、アメリカ政府はＥＰＡ（Environmental Protrection Agency）＝環境局を作り、1892年に設立されたSierra Club や1905年にはじまったNational Audubon Society等の草の根グループの民間やボランティア団体と、政府機関が各々の立場で、しかし、地球環境を考えるという同じ目的で活動を開始しました。「第１回地球の日」は新しい地球環境保護運動への１つの起点として認識された日です。

そうして1995年、「25周年アースデイ」にも参加しましたが、この25年の間の環境悪化が、かえって環境が企業利益を得るためのビジネスになるということで、パレードやバザーが行われたりして、この場が企業や参加国の宣伝の場と化していたことは否めません。また、同じ年に第１回環境マネジメント国際会議が日本で開催され、環境をどのように管理したら良いかを討論する時代になって来ています。

現在の環境の問題は、汚染に関して言えば、大気、水、熱、海洋、土壌等があり、その他に熱帯雨林の破壊や酸性雨、地球温暖化、オゾン層破壊、有毒物質の廃棄などがあります。この問題点の解決のために、1900年代の始めはボランティア団体が資源と生態系をやっていたわけですが、1900年代の真中ごろから人間の快適性の追求となり、要求需要が強くなると共に、経済的充実に応じて過大供給にもなり、これが環境を変えて、結果的に自然回復できなくなってしまい、それを規制するための諸々の法律や反対団体が生まれてきた訳です。

環境の定義によれば、「自分達の住んでいる環境は、いつも変形しており、それは人間の文化により人工的に変えられており、又その環境によって文化は創造され、進化し影響されている」ということになっています。人間と環境は相互に切り離しては存在が考えられないものです。

2．日本は何をすべきか。

今地球上では、様々な環境問題が起きています。例えば木材の濫伐。これは直接的には酸素の供給量に影響してくるわけですが、又同時に動植物の生態系を変える原因にもなり、人間にとっても、その他生物にとっても切実な問題です。紙はこれら木材から製造されていますが、今では木材を使わない紙、ケナーフ（麻）やパピルス（アシの葉）など、新しい材

料が見つけられています。紙だけでなくカーペットなども化学製品ではなく、有機的に分解するものも出てきました。これらの新しい環境材料、エコマテリアルというものに今、開発は進んでいます。日本は技術を売っている国なので、それを活かせるのではないでしょうか。また、廃棄熱や排水の温度が生態系を崩していると言われている熱汚染の問題もあります。日本は、川の水を熱源として利用しようと計画しているようなのですが、本当に未利用エネルギーと考えていいのでしょうか？その辺りを我々日本人は考えなければいけないのですが、環境を知るためには学習しなければなりません。例えば、無知な旅行業者が計画したものが、如何に自然環境を悪くしているかは、飛行機が炭酸ガスやフロンを１万メートル以上の高度で放出し、また自動車輸送による排ガスが生態系を悪くし、その最終旅行目的地が絶滅危機にあるサンゴ礁であったりすることを我々自身で学習し、認識することです。

3．企業として何ができるか。

今や世界の著名な企業は、毎年環境レポートを株主等に公開して、会社が如何に地球環境問題解決のために関心を払っているかの実績を示しています。このことが各企業の評価の第１順位になれば良いのですが、現在のところは、やはり企業利益の追求の一環としての意識が見えかくれしているのも事実です。ボランティアの団体はこの点を厳しく見て企業責任を目覚めさす活動を行っています。

イギリスのチャールズ皇太子を頭に世界の１１の著名なホテルは、共同目標として、地球環境保護のための具体的な活動の場を設定しています。1993年に始まったこの活動は、同一業種の人々が、世界のネットワークの中で、環境文化の確立や、廃棄物処理、エネルギー、水や空気の汚染防止、製品の購入方法の工夫、毒物や化学薬品、洗剤の管理等で、情報交換と実行を目的としていることに価値があるでしょう。

また環境問題は、職業として注目されてきています。アメリカの環境を職業とする企業の就職案内書によると、ゴミ処理、水、魚、公園、教育などの職種があり、現在30万人程の人が働いており、毎年増加する傾向にあります。そうして環境のスペシャリストとなるわけです。ここで言われているのは、環境は頭で考えるものではなく、実際に行動するものだということです。

サンフランシスコの民間のリサイクルセンターでは、ゴミの収集を行っています。そこに集められたゴミは、プロの判断で分別されます。これは近隣の住民達が決められた金額をこのセンターに支払うことにより運営を委託しているものです。また生ゴミは、加工された上で、ここの養豚場の豚の飼料となります。この方法は、昔ホテルでも行われていたそうで、特別新しい考え方というわけではないのです。又、廃材は各自が各々の車でこのセンターに持ち込み、そこで類別され、加工処理されて原材料として使われたり、再生材料としても売られています。そういう意味では、「リサイクル」という手法も、昔からあったものであり、すぐにできる、身近に自然に入っていけることではないかと思います。

しかし同時に、現在の地球環境問題は、進んだテクノロジーの助けなしに解決していくことはできません。例えば、オゾン層を破壊するフロンガスや、海に流れ出した石油の回収や、あらゆる汚染源となるエネルギーを生み出すための燃焼という行為は、開発が進んだ人間の生活が生み出したものであるが故に、一層テクノロジーの責任を新しい観点で気づく必要があるでしょう。